

2 シンポジウム さっぽろれきぶんフェス

チラシ（表）



チラシ（裏）



(1) 開催概要

■日時

平成30年（2018年）11月23日（金・祝）10：00～16：00

■場所

札幌駅前通地下広場（チカホ）北3条交差点広場（西）

■来場者数

講演傍聴者 168名（最大）／パネル展 904名／体験プログラム 376名
合計 1,448人

■ステージ企画のプログラム

時間	内容
13：00	開会
13：05	○講演 ・歴史文化基本構想について（北海道大学観光学高等研究センター 西山徳明氏） ・札幌「意外」史（街歩き研究者、0.tone編集部 和田哲氏）
14：05	○活動報告 れきぶんワークショップや現地調査をふまえ、地域の「お宝」の魅力を発表。
14：50	○パネルディスカッション ～札幌の「お宝」再発見～ 札幌の文化財の保存や活用についての考え方やアイデアなど、専門的、実践的な立場から意見交換。
16：00	閉会

■その他の企画

○パネル展

札幌の歴史文化に関わる下記テーマのパネルを展示。

- 歴史文化基本構想について
- わたしたちのお宝写真展
- れきぶんワークショップ活動報告
- 郷土資料館、札幌市博物館活動センター紹介 等



○体験プログラム ～知ってた？地域のこんなお宝～

札幌の歴史文化を身近に感じ、興味関心を持つきっかけとなるよう、参加型体験プログラムを実施。

- 札幌軟石を使ったクラフトワークショップ
- 松ぼっくりでクリスマスツリーづくり
- 縄文土器の3次元パズル



○参加型企画 ～まだまだあるはず！地域の歴史文化資産～

市民が感じる地域の「お宝」を広く集めるため、誰でも書き込むことのできる札幌市のマップを展示し、意見を募集。



【まだまだあるはず！地域の歴史文化資産 結果】



(2) 講演記録

1) 講演1 テーマ「歴史文化基本構想について」

■講師

西山 徳明 氏（北海道大学観光学高等研究センター センター長） ※所属は講演当時

■内容要旨

○日本遺産の少ない北海道の7つのストーリー

- ・現在文化庁が東京 2020 年オリンピック・パラリンピックに来た外国人のために日本の歴史文化を学べる場所「日本遺産」を 100 か所リストアップしている。
- ・その中で北海道は雄大な面積を持ちながら 3 か所しかピックアップされていない。北海道の歴史文化は日本全国を語る上で重要であるため、北海道開発局と協力してパンフレットを作成した。内容は「縄文文化」「アイヌ文化」「近代文化（江差、松前）」「開拓時代」「農村景観・田園景観」「近代化産業遺産」など7つのストーリーを収録した。



○北海道の開拓により札幌に残る歴史文化

- ・札幌にはアイヌ民族の歴史があり、水脈や居住地、狩場等の生活の一部からつけられた地名が付き、今の時代まで残されている。札幌はアイヌ文化をたどる宝庫でもあり、今日それを読み取って開拓、開発をしている。
- ・開拓使の時代になると、明治 11 年までにすでに北海道の開拓地の中心は札幌になっており、開拓使本庁舎もすでに建設されていた。
- ・日本の都の中心施設はみな中国の教えより、南を向いて建っているにもかかわらず、なぜ赤れんが庁舎は東を向いているのか、疑問であった。想像では、北方の脅威に対する備えや、北海道の開拓に対する強い思いではないのかと考察すると非常に面白く魅力的な資源がたくさんあり、物語としても非常に興味深い。他にも屯田兵や屯田兵村の話、農産物、田園景観、産業遺産など、北海道の歴史を語る上で非常に重要なポイントを札幌は押さえていると理解できる。

○文化財の定義について

- ・「文化財」とは、文化財保護法で成り立っている概念であり法律ができてから使用された言葉。意外に新しく、戦前は「記念物」「国宝」等と言われ、「文化財」という言葉が無かった。
- ・文化財は6類型に分けられ、国や自治体が指定した国宝級や一流のものだけでなく、指定されていなくとも文化財と呼べるものがあるが、全ての文化財を税金で保護していくことは困難な為、指定等がされているのは国宝級の選りすぐりのものだけになっている。
- ・文化財は祀られ、身近でないと認識されている人が多いと思うがそれは違う。「文化財」は、国や自治体から指定、選定されていないものを含めてすべての歴史的なものを「文化財」と置き換えて話していきたい。

○失われている未指定文化財

- ・2007年に文化庁からの声かけで今後の文化財保護についての議論が行われ地方の文化財の現状を説明した。地方では急速に文化財が消滅しており、被害の拡大を防ぐための議論を早急にと提案した。
- ・札幌においても建物だけでなく、方言、郷土料理、古文書、家庭にある古い写真などはすべて歴史文化資源であり、知恵を出し合って保護していかななくてはならない。
- ・国や自治体が守ってくれるのは、指定、選定された文化財のみだが、未指定の文化財はその1,000倍あると言っても過言ではない。この未指定の文化財をひも解くと、食、茶道、華道、遊びと伝承、郷土食から道端のお地蔵様まで多くあり、これは現在の文化財カテゴリー内には拾われていない。拾われないものも含めると、文化財がさらに豊かに感じられる。

○従来では拾われなかった文化財を拾い上げる歴史文化基本構想

- ・歴史文化基本構想は、地域に深く根付き、土地の生活に寄り添い残っている文化財を指定、未指定に関わらず個人の思い入れ価値、遺産を成り立たせる周辺環境までも含め総合的に保存活用していくという考え方に立つものである。
- ・文化財の6類型ではとらえられなかった、集落の中の建物、土地などを挙げていき歴史文化基本構想の考え方に立って地域全体を一体として捉えることで、具体的に浮かび上がってくるものがある。
- ・歴史文化基本構想が考える文化財保護とは、行政が文化財を守っていくのではなく、市役所が先頭に立ち基本的な計画を練って、市民や地域住民が相談し合い守っていくということ。
- ・いざ自分が文化財を持ち寄るとなると、専門家に見てもらうには躊躇してしまうものだ。しかし、価値や評価が確立していなくとも、確認し合うことで新たな協力者が現れたり、検討が行われ広がりを見せたりする可能性があることから、指定、未指定関係なく文化財を存分に自慢し合ってほしいと札幌市は考えている。
- ・この基準で持ち寄られると膨大な量となるが、観光資源としたい場合にはストーリーでまとめた方が理解しやすく、利用し親しみやすい。
- ・まち割、創成川の水路、川筋、古道等身の回りにも実はたくさん開拓使由来のものがあり、重要に感じなければ消失してしまう。開拓使の近代改革の歴史を見ただけでも実は価値あるものがたくさんある。歴史文化基本構想の呼びかけで集まった文化財も、身の回りの環境からも関連性あるものを探して、少しずつ数珠つなぎしていったらどうかという考えもある。

○札幌市でのこれまでの活動について

- ・札幌市は地域住民と文化財を探し発表するワークショップを既に開催している。その後の現地調査や資料をリスト化したりなど動き出している。
- ・歴史文化基本構想を検討する委員会では、歴史の基本となる札幌の自然についてまとめ始めている。ストーリーを束ねていったときに見える札幌の歴史文化の特徴は大きく7つに分けられる。

○札幌市の歴史文化の特徴について

- ・特徴の1つは豊かな地形、地質が育んだ自然と人々の営みである。
- ・札幌は自然に恵まれた場所で、化石の出土もある。藻岩山や豊平川に代表される自然と、今日に継承されているアイヌ民族の精神。札幌は水が街中を張り巡って湧水もあり豊かな場所だからこそアイヌ民族が生活していた。このかつての札幌の都市計画は水を生かしたもので、水は工業地区を造るのに役立ち、水運にも活用された。水なくして札幌を語ることはできない。
- ・また、冬季オリンピックにより街が大きく変化したことや、積雪寒冷地特有の都市形成についても、札幌の特徴である。
- ・小さな地域ごとに様々な特徴があり、このような歴史文化の特徴の中で、アイヌ民族が住み、近代の改革が起き、さらに札幌オリンピックを経て巨大都市となり世界へと発信していく。このようなストーリーを理解している観光客は多くない。

○歴史文化基本構想の活用と今後の取組への期待

- ・札幌の歴史文化の特徴をもう一度捉えなおし、観光客に大切な札幌の歴史や文化がある事を理解し知ってもらいたい、学校の教育への利用や観光への利用、魅力的なまちをつくる景観施策にもつなげていきたい、という思いでこの施策は文化部局だけでなく、景観部局とも連携しながら全庁挙げて取り組んでいる。
- ・一番重要なことは、住民の方々が札幌を好きになり、見直し、惚れ直すことであり、今後を期待している。
- ・是非皆さんのご理解とご協力をお願いしたい。

2) 講演2 テーマ「札幌意外史」

■講師

和田 哲 氏 (街歩き研究家、0. tone 編集部)

■内容要旨

○「札幌『意外』史」とは

- ・「意外」とは、市民には共有されていないと感じ、教科書や歴史場面でも語られていないことから「意外」と示した。

○道庁はなぜ東を向いているか？

- ・明治2年11月、佐賀県より島義勇判官が札幌に到着し、都市計画を練ったが、実際に札幌を観察して練られたものではなく実情に即していないものだった。内容としては、最北に石狩の国本府（役所）、その南に官邸が並び、さらに大通り、土塁を挟み南側に一般庶民や商店街を設置する構想であった。
- ・島判官は着任して3ヶ月後の2月に解任されることとなり、土佐藩出身の岩村通俊が後任となった。ここで島判官のまちづくり構想は大きな問題を残しており、JR北側に役所を設置する構想だった当初の計画だが、島判官は11月から2月までの冬期間の着任であった為、雪解け後の地質を確認しておらず、JR北口の地質が低湿地であることを把握していなかった。この事から、当初予定していた場所に本府を設置することが困難となってしまった。そこで、本府を北側に突出させず、官邸街と市民の生活圏との距離や官邸機能が損なわないように官邸機能の一部のみを移動させるなどの策を考案しながら本府の位置を決定していった。
- ・位置が決定し明治6年に建てられた開拓使本庁舎だが「なぜ東を向いたか」については明確な答えはなく、北海道神宮が北向きに建立されたように、ロシアを牽制する為なのか、札幌の位置が北海道の西にあることから、東に向かって開拓を進めていく意思を汲んで東に向けたのではないかと考えられている。



○開拓当時の道路名

- ・道路には浦河通、胆振通、山越通、有珠通等、道内の地名がつけられていたが、数十年もしないうちにネタが付き地名から数字が当てられるようになった。

○北一条通はなぜ4丁だけ幅が広いのか？

- ・明治8年の札幌の地図から確認すると、開拓使本庁舎は現在の道庁とほぼ同位置にあるが広く土地を使用しており、本庁を囲む道路だけが広がっている。通常の道路は幅11間（1間=1.8メートル）に対して（大通りだけは60間であり防火帯として火事の燃え移りを阻止するためにつくられた）、本庁の敷地は幅20間の記載があり約36メートルに相当する広さである。この広さは現在の北一条通りの道幅と一致しており、明治時代から現在も変わらない事がわかる。そして、北一条通の4丁区間は本庁の南側にあった4丁区間であり、本庁南側の道路だった歴史を物語っている。

○狸小路1丁目には、なぜ十字路があるのか？

- ・明治26年の地図に、現在の狸小路2丁目の先に細い路地を確認することができる。これは、明治24年に店を開いていた三国屋が自分の敷地内に貫通させた路地で、跡地が弁天小路と呼ばれた。明治の終わりに弁天小路を含む狸小路はここでT字路になっていた。
- ・T字路の突き当りには大型商店の札幌商品陳列場があったが、焼失したことをきっかけに、狸小路を創成川まで貫通させた。その後、1丁目には人がさらに流れるようになり、狸小路1丁目のみ現在の十字路のある構造になっている。

○狸小路1丁目にしかない路地 通称「L字街」はなぜできた？

- ・昭和8年、L字街の角に浅草観音堂と呼ばれる寺が建てられた。建立位置がちょうどL字の角にあり、狸小路側からも西2丁目通りからも参拝に入れるようL字型の参道を設けた。しかし、昭和50年ごろ、観音堂は取り壊され現在は参道が路地として残され「L字街」として現在に至っている。

○藻岩山の秘密

- ・藻岩山のロープウェイ中腹駅舎外に昭和60年頃に建てられた神社があるが、これはスキーヤーの無病息災を願うために建立された。本来神社とは違い、11回冬季オリンピック開催当時のIOC会長アベリー・ブランデー氏、北欧神話でスキーの名手であるウル（男性）とスカディ（女性）が宗教の枠を超えて祀られている珍しい神社。

○まとめ

- ・札幌は歩けば身近なところに人間臭く、愛すべき歴史に出会うことができる都市。歴史文化資源は自身の暮らしの周りであることを知り、帰宅の際など、北一条通や狸小路商店街を歩いてほしい。

3) れきぶんワークショップの活動報告

れきぶんワークショップで調査し取りまとめた地域のお宝の魅力について、パネル展での報告に加え、3つのグループより来場者へのプレゼンテーションを行った。



■報告1 「東洋第2の鉱山の歴史を 82年前58人の子どもたちが伝えるまちの記憶」

「東洋第2」と呼ばれた手稲鉱山は、人口約8千人が住むほど栄え、手稲のまちづくりの基礎を築いた。その歴史を伝える手稲西小学校「鉱山の部屋」には、鉱山にまつわる貴重な資料だけでなく、当時の鉱山の生活の様子が描かれた58枚のクレパス画が展示されており、82年前の子どもたちが描いた当時の町の様子を今でも見ることができる。

■報告2 「れんがへの愛と誇り」

白石区には、JR白石駅をはじめ、やなぎ公園、停車場、製綿工場など明治はじめにこの地に存在した鈴木煉瓦製造場で造られた「鈴木れんが」を使った建物やその跡地などが多く存在する。鈴木煉瓦の製造場設立を要請したのは、北海道庁赤れんが庁舎の設計などを行った平井晴二郎。鈴木れんがは、北海道における本格的れんが製造業を先駆けてれんがのある札幌の街並みや風景のイメージに大きく貢献している。

■報告3 「乗って探そう札幌の未来 市電」

札幌市電のはじまりは、札幌軟石を運ぶ「札幌石材馬車鉄道」であった。その後経営は札幌市へ移行し馬車から市電へと移り変わり、路線は新琴似駅や苗穂駅、豊平駅にまで伸びたが、モータリゼーションの到来やバス、地下鉄の開通により一時全廃の危機にもなった。現在の路線は市民の熱い思いが通じて残されたものである。この市電の路線図の変遷からは、札幌のまちの歴史を辿ることができる。

4) パネルディカッション テーマ「札幌の『お宝』再発見」

■パネリストなど

	氏名（所属）	分野
コーディネーター	神長 敬（株式会社KITABA代表取締役）	
コメンテーター	西山 徳明氏 （北海道大学観光学高等研究センター センター長）	
パネリスト	和田 哲氏（街歩き研究者、0. tone編集部）	観光
	黒岩 裕氏 （旧黒岩家住宅（旧簾舞通行屋）保存会事務局長）	地域
	古沢 仁氏（札幌市博物館活動センター 学芸員）	教育
	石川 圭子氏（古民家Gallery鴨々堂店主）	活用・実践

■内 容

①自己紹介、活動紹介

②地域のお宝について

○「まだまだあるはず！地域のお宝」の意見の紹介

・手稲山、サクシュコトニ川、安春川など、自然系が多かった。

○「まだまだあるはず！地域のお宝」やワークショップ活動報告についての感想 (和田氏)

・手稲鉾山について、昔の先生が82年間も子どもの絵を保存して下さった、素晴らしいことだと感じ、宝を発掘されたのも素晴らしい。また、市民の皆さんがどんどん参加して、自主的に伝えたいという人が集まって活動されるのは素晴らしい。これからは、積極的に歴史を発掘して、残して、形にして伝える努力をしなければ、歴史は継承されない段階になっている。

歴史の方から積極的に観光客や一般の人にアプローチするやり方が必要になる。



(黒岩氏)

・よくここまで調べ上げたと驚いた。簾舞にも、簾舞小学校に保存されている映像や青い目の人形、簾舞ダム（藻岩ダム）など多くの宝がある。どう生かしていくか、各地区でも考えられていると知り、現在実務している中にも生かしながら、今後、維持、保存活用していきたい。



(古沢氏)

・地元愛が伝わってきた。自然科学の視点から言うと、市電は扇状地の上を走っており、れんがは月寒台地の火山灰が原料になって風化したものが粘土の原料になっており、手稲鉾山は札幌西部山地で、札幌の地勢・地質を反映したお宝の紹介だった。また、実は以前、手稲西小学校の鉾山の部屋にお邪魔したことがあったが、

一生懸命見ていたのは鉾物資源などで、絵を見て感動されて宝だと感じるどころに、こういう視点が必要だと気付かされた。これから博物館も皆さんと一緒につくっていかねばならないと、改めて感じている。地元の方々の愛情や愛着といった視点を、博物館に集めて展示ができれば、市民の方や札幌に来た方に喜んでいただけるのではないかと。



(石川氏)

- ・活動の中で調べる楽しさや学ぶ楽しさが出てきたが、ここに次世代を担う子どもたちをどのように巻き込んでいくかが大切である。自分たちの住んでいる地名などの成り立ちから興味を持ってみんなで共有していく機会は良いと思う。



③文化財の活用について

○文化財活用の意義、効果について

(和田氏)

- ・北海道は今、インバウンドの観光客がたくさん来ている一方で、日高本線の沿線自治体が廃止に同意したり、鉄道の駅がなくなったり、路線が廃止されたりと寂しい状況になっている。しかし、昔は北海道にはたくさんの鉄道が走っていて、釧山やレンガ、石炭など、たくさんの産業があった。産業遺産、鉄道の遺産はこれから、観光資源として第2の役割を果たしていく。「旧石切山駅」という定山溪鉄道の唯一残っている駅舎は、現在石山振興会館という町内会の施設に使われているが、そこにあるだけで、地域の中心という感じがする。駅は不思議で、鉄道がなくなっても拠点という感じが残り、人の吸引力がある。北海道には新たな第2の人生を歩む遺産がたくさんある。



(黒岩氏)

- ・簾舞の通行屋まつりが9月の末の日曜日に開催されている。まちから越してきた方から「何か簾舞に特色あるものはないか」という意見が出て、文化財を生かして、市民と簾舞の住民の交流を図ろう、子どもたちに文化財の保護、育成、活用について知ってもらうことから始まった。外部の方のアイデアや行政のサポートをいただきながら、まちづくり教育などしていきたい。

(古沢氏)

- ・博物館活動センターで街歩き事業を行っており、自然とか自然史を絡めた街歩きをしている。毎回定員の1倍強の応募がある。しかし年に1度、文化財課と開催している自然文化財ウォーキングツアーは応募数が5倍から6倍に増える。文化財という言葉には人を引きつける魅力があり、文化財には潜在的な能力がある。潜在的な能力は、長い時間をかけて守り継がれてきたため、文化財は地元にあって初めて輝くものだ。地元で見ていただくのが一番の、博物館における資料だろうと思っている。もしも博物館が今後できたときには、自然の背景、あるいは地元の方々、あるいは先人としての知恵や情熱を情報提供して、皆さんに感動を確認するために実際に地元に行っていただく装置になるべきだと考えている。
- ・「学校 DE カルチャー」という事業では、各小学校の周辺の地形、地質、それ

を背景にしたまちの生業、歴史などを踏まえ、子どもたち自身の身近な自然とまちがどう関連しているかを実感していただく事業を行っている。少しでも内容が子どもたちの心に通じ、将来的には子どもたちが成長していく中で、地域への誇りや愛着、さらには自分自身が地域の魅力を発見して発信する人材に育ってくれるといい。

(石川氏)

- ・私が活動をした5年前は札幌駅前開発に力を入れており、すすきのに人がいなくなっていた時期だった。そこからどうやって地域を盛り上げるか、みんなで歴史を学びながら取り組んだ。回復はしたが、逆に札幌市の方がすすきのを盛り上げることができるということで、盛り上がり過ぎ、現在は大規模な再開発が起こっており、人の奪い合いが起こっている。今年に入ってからホテルの申請が十数個出て、実際に中島公園からすすきのの間はホテルだらけで、地元に住んでいた方々の地価が上がって住めなくなってきた。そのため、せっかくできてきたコミュニティーが破壊されつつある。
- ・地域のためにやっていたのに、何のためにこういうことになっているのか、痛感しながらやっている。札幌市は、北海道の中の中枢を担う重要な都市であり、再開発は必要と思うが、やり方によっては、文化、文脈、地域コミュニティーを破壊してしまうこともあるため、民間と行政が一緒になって、地域にとって残していかなければいけないものを意識しながら残さないといけない。

④まとめ

(西山氏)

- ・専門家の方々の強力なネットワークができていると感じた。
- ・活動報告は、切り口の違う、しかし歴史文化の本質を突いている発表だった。手稲鉾山についての活動報告は、私も大変感動し、82年前の子どもたちの絵は、まさにコレクションで、ある一人の先生が一つのテーマのもとにコレクションとしてまとめ、しかも大切な思いと価値を見出して大事に保存していた。これは立派な文化財だと思う。また、そういったものに価値があると気づけば、他にもあると気付けるようなすばらしいお話だった。
- ・れんがのお話は、景観との関わりでも理解できると感じた。工場や現在生産しているものは残っていないが、記憶が残っている要素が今も景観の中に生かされている。札幌において都市をつくる礎になっていて、それがまちの記憶として色々なところに使われていると、歴史のストーリーと、現在の白石で、どういう場所に、どんなふうに使われているかをきちんと記録し、リストアップすれば、すてきだと思った人がモチーフとして使ったり、素材として使ったりしていくことで、白石のアイデンティティーが景観という側面からできてきて、行政も黙っていれなくなるというようなことにつながり得る。
- ・市電の話の中で一番おもしろいのは、次の計画と一緒に考えておられて、幾つ



かの提案があったこと。まずは啓発、みんなに知ってもらうのは良いと思う。もっと延伸して、新しい札幌のまちの姿につなげていくという提案もあった。今あるものを一生懸命調べるから、次のことに意欲が湧き、発想が出てくる。

- お三方のお話を聞いただけでも、れきぶん（歴史文化基本構想）という取組が、どれだけ我々にわくわく感を与えてくれて、次の札幌に対していろいろなことを示してくれるかということをお勉強させていただいた。
- 私はワークショップという言葉が好きじゃない。というのは、やりっ放しワークショップというのが多過ぎたからである。しかし、見つけ出されたものは今回、札幌市の歴史文化基本構想に反映される。そして、文化財保護法が改正されて、歴史文化基本構想は自治体がつくるべき歴史文化のマスタープランとして法律に位置づけられる。指定登録の文化財は、一度記録されたら、国の体制が変わらない限り歴史に残る。構想の中でワークショップ等を通じて記録されたものが、今、札幌市が検討している登録システムの中で、遺産をどのような形で登録して、市民の方に使いこなしてもらおうかと、登録の仕組みが確立したら、ワークショップは単なるワークショップではなくなり、皆さんのお宝が歴史に残っていく。保存されるかどうかは皆さん次第だが、失われないものとして歴史に残る。それだけでも、私は大変な価値になると思っている。要するに、札幌市の文化財保護行政ないしは国の文化財保護行政というのは、法的に担保して大切な資源として使うだけでなく、日本の歴史文化をつくる大切な記録として記録するということが法律で約束しているということになる。歴史を刻んでいくワークショップになるためぜひ皆さんおもしろがって、身を乗り出して、自分の持っているものを自慢してほしい。
- その結果、今日ここに集まったプロフェッショナルが、プロジェクトが始まったら忙しくてたまらなくなると、専門性をもっと増やさなければいけない。プロフェッショナルが増えたときに札幌市は魅力的なまちになっていくと思う。歴史文化基本構想を、皆さんに3時間という短時間で理解していただくには、すばらしい布陣のメンバーであったと感銘して、私の発言は終わらせていただきたい。